

北山友松子の医学 ——『傷寒論』への注目——

向 静静

立命館大学文学研究科

本報告では、明からの亡命者である馬命字の息子である北山友松子の医学に注目し、とくに彼らが『傷寒論』を重視したことに着目して検討する。

北山友松子(1640?-1701, 仁寿庵と号す, 北山寿庵とも称す)は、明からの亡命者であった馬命字と長崎丸山の遊女との間に生まれた子である。馬命字は福建長楽県の人で、明末の兵乱を避けるため1624年から1627年の間の時期に来日した。葉種商として活躍し、滞在すること約30年間、中国医薬書籍、薬草の輸入に携わり、診療活動を行った。また、長崎に崇福寺が建造された際には数回にわたって故郷の福建省と行き来するなど奔走、尽力したという(洪涛, 2017)。

このような環境で生まれた友松子は、長崎在住時、渡来してきた多くの中国人医家を訪ね、彼らに教えを請う。こうしたなかで彼は、1660年に福建からの帰化僧であった化林(性僕)と出会い、その医学に感銘を受け、化林に就いて医学を習い始めた。浅田宗伯によれば「從僧化林, 學仲景奥旨」といい、友松子が化林に『傷寒論』を学んだことが分かる。また、彼は独立性易につき、『素問』『靈樞』と本草学を習得し、さらに宗伯が「授閩醫之傳」と述べるように、父馬命字か師の化林から福建地方の閩医学をも教わっていたことが推測できる。

明から亡命者の子である友松子は、中国語にも日本語にも堪能な人物であった。『日本医譜』に「友松子善閩語通事」とある通り、彼は福建語を流暢に使いこなしたという。そのため、彼は長崎に渡来してきた中国人医家とスムーズに交流ができ、同時代中国の最新医学状況を把握することも可能であったと思われる。

『増広医方口訣』などによれば、彼がしばしば引用し、重んじたのは、朱丹溪、李東垣による医書であったが、それ以上に張仲景による『傷寒論』の処方重要視していた。このことは、『先哲医話』および『近世崎人伝』からも確認できる。

張仲景一書、炳如日星、亘千古不可磨滅、熟讀者知其意【當時醫多讀素難、不讀傷寒論、故發此言以示為萬世理道之神書、救人之秘典也】(『先哲医話』)。

凡當時は醫名ある人といへども、東垣丹溪の窩窟をいづることあたはざる間に、獨り長沙の長ずるを規範とし、下明末の諸家をも採りて佐使とす。其言に曰、如為人治療則不可不全讀仲景之書也(『近世崎人伝』)。

当時医家の間で、『素問』『靈樞』や李東垣、朱丹溪らの医書は広く読まれていたが、『傷寒論』はさほど注目されていなかった。従来の研究では『傷寒論』に注目し始めたのは、名古屋玄医と指摘されてきたが、玄医と同時代に生きた友松子もまた『傷寒論』に注目していたことは無視できないだろう。『先哲医話』によれば、友松子は「経絡」「脈」の重要性を説きつつも、それらに拘泥せず、医学の「実用」を強調したという。また、実際の治療において彼は「隨證而施藥」と主張するなど、のちの古方派医家よりも早く『傷寒論』に基づく治療法に注目していたことは特筆に値する。

先述したように帰化した人々との交流をもっていた友松子は、新しく中国から舶載された医書に関する情報もいち早く入手することができたと思われる。だからこそ彼は、古方派医家らより早い段階で『傷寒論』に注目しつつも、一方で『傷寒論』のみならず、明末諸家の医学をもとりいれることができた。

以上のように、友松子の医学は、その孫・道脩が『北山医案・序』に「左長沙、右東垣、源究素靈之蘊」と記したように、『傷寒論』、李東垣の医学、『素問』『靈樞』を中心とするものであった。当時日本の医家の間では、いまだ重視されていなかった『傷寒論』を重要視する友松子の姿勢は、画期的なものだった。それは、明代の『傷寒論』研究状況や、長崎に渡来してきた『傷寒論』研究書をいち早く把握できたことによるものであり、さらに進めていけば、中日の医学をめぐるコミュニケーションを背景とするものだったと思われるのである。